

[書評論文]

Rachel Giora, Michael Haugh (Eds.) *Doing Pragmatics Interculturally: Cognitive, Philosophical, and Sociopragmatic Perspective*

Berlin: Mouton De Gruyter, 2017, xi + 350p., ISBN978-3-11-054384-1

田中 廣明
京都工芸繊維大学

1. はじめに

伝統的な「異文化間語用論 (intercultural pragmatics)」は、異文化間に生じる語用論的な問題を扱う、語用論と異文化コミュニケーションの接点 (交差するところ) にあるとされている。本書は、そのタイトルに「認知・哲学・社会語用論的観点から、異文化的に語用論をする」(下線は筆者) とあるように、そうした従来の枠を超えて、さらに広範囲にわたる理論的、方法論的統合を目指すとしている。本書の理論的支柱となっている Kecskes (2014) では、異文化間での人々の出会いにおける言語使用の認知的・社会文化的側面の研究が、語用論のさらに幅広い理論化に貢献するとしており、本書も Kecskes の sociocognitive approach to pragmatics に追うところが大きい。

語用論が様々なアプローチや研究方法、理論による多様な分野にまたがる中、それらの分野を統合させているのは、言語使用とそれに伴うコミュニケーション上の言語の役割に焦点を置いてきたからであるのは否めない事実である。ただし、語用論は細分化が進み、伝統的に言語学の一分野として統語論や意味論などと並列的に扱われてきた一方で、言語機能を重視した言語とコミュニケーションに特定の視点を置く一分野として扱われてきた面も大きい。それに対して、近年、その広範囲にわたる様々な理論的、方法論的な視点の再編成が求められているとされる (一つに還元するのではないことに注意)。その再編成は、それぞれの専門家にとっても、より経験的でおかつ理論的な基盤に根ざしていなければならず、本書で言う異文化語用論がもっとも「強い声 (strongest voice)」を発することができるとしている (Giora and Haugh 本書序章 p. 3)。

こうした視点の拡大は、従来語用論が根ざしていた、哲学的、言語学的視点にとどまらず、認知的、実験的、談話的、批判的、対人関係的、社会的、さらに文化的な視点を含むものであるとされる。本書は、序章を含めて22章にわたっており、その守備範囲の広さを伺わせるが、こうした拡大がかえって分解 (fractured) を招くことも多く、その危険性

が指摘されている。そこで、各分野間での相互情報と対話が必要であるとされている。

2. 本書の構成と各章の概要

本書は3部と22の論文 (Rachel Giora and Michael Haugh, 1. Introduction を含む) から構成されている。各部は上述した認知・哲学・社会語用論的観点が網羅されており、第1部は社会認知的・実験的アプローチ、第2部は哲学的・談話的アプローチ、第3部は対人的・社会制度的アプローチとなっている。本節では各章と Introduction をそれぞれの概要を援用し簡単に述べ、次の第3節で本書の構成上最も重要と思われる「共通基盤」についての論考を2つ解説する。

筆者	タイトル	概要
Rachel Giora and Michael Haugh	Introduction	各章の紹介
Part I: Socio-cognitive and experimental pragmatics		
R a y m o n d W . Gibbs, Jr. and Herbert L. Colston	The emergence of common ground (3.1節で後述)	
Robert E. Sanders	Overcoming differences and achieving common ground: Why speaker and hearer make the effort and how they go about it (3.2節で後述)	
Marta Dynel	Is there a tumour in your humour?": On misunderstanding and miscommunication in conversational humour	miscommunication (コミュニケーションの齟齬) と misunderstanding (誤解) は注意深く分ける必要があり、misunderstandingの方は、真正のもの、計画的なもの、誤解と装ったものとタイプわけが必要だとする。miscommunication, misunderstandingとの接触が、ヒューモアを生じさせたり、阻止したりすることになるとする。
Victoria Escandell-Vidal	Note for a restrictive theory for procedural meaning	概念的意味と手続き的意味の言語的事実に基づいた区別を概観し、手続きの意味は、様々な表示レベルで、概念的意図システム内で計算できる「解釈可能な素性」に貢献できるものに制限されるべきだとする。
Marit Sternau, Mira Ariel, Rachel Giora and Ofer Fein	Deniability and explicatures	表意 (explicature) を導く推論が、話し手がその表意を否認する度合い (deniability) によって、その表意の強さに様々なタイプが見られるとする実験語用論の論考。

Eline Zenner, Nane Mertens, Laura Rosseel and Dirk Geeraerts	The acquisition of loanword pragmatics: An exploration	オランダの小学生が、どのように英語の借用語を評価するかを漫画を使って検証した論考。年齢差にかかわらず、漫画というコンテキストでは、英語の借用語は肯定的に評価される一方で、年齢が上がるにつれて、子どもの地位、連帯感、社会性によって、肯定的な態度は、さらに強化されるという論考。
Jonathan Culpeper, Michael Haugh and Daniel E. Johnson	(Im) politeness: Metalinguistic labels and concepts in English	impoliteness を表現する metalanguage (impolite, rude など) が、impoliteness という概念をどの程度表すかを実験的に検証した論考。メタ言語は会話参加者間の力関係によって、様々な関係を持ち、会話の状況と使用目的によるというもの。
Part II: Philosophical and discourse pragmatics		
Laurence Horn	What lies beyond: Untangling the web	lie (嘘) と誤解を与えやすい言説 (misleading) が Grice 流の what is said と what is implicated の区別によるとした後、嘘は「真」を言いながら「偽」を含意させる」という近年の見方に反論する。「嘘」だという基準を assertion に置き、裁判、実験室、日常の会話から広範囲な用例で検証している。
Kasia M. Jaszczolt	The true provenance of self-reference: A case for salience-based contextualism	自己指示表現 (self-reference) に関して、理論的に文脈主義 (contextual approach) が優れているとする分析である。特に、Daddy will finish his dinner and will play with you in a moment. や One tries to do one's best. など、自己指示表現が3人称へシフトした表現が扱っている。
Wayne A. Davis	Transparent reports as free-form idioms	believe のような命題態度を表す述語で、主節の主語の心的表示内での人物と従属節の主語が同一指示かどうかについて、不透明な読み (opaque reading) (非同一指示) と透明な読み (transparent reading) (同一指示) がある (例: Lois believes that (i) Superman / (ii) Clark Kent can fly. (Lois は Clark Kent の恋人。Lois が Kent と Superman が同一人物だと知らなければ (i) は偽、(ii) は真 (不透明読み)。Clark と Superman が同一人物と知っている育ての親の発話なら、(i) も (ii) も真 (透明読み))。筆者はこれらに対して、メタ言語否定などの例を挙げ、後者をイディオムフリーと同様の機能を持つとする。

Jacques Moeschler	How speaker meaning, explicature and implicature work together	話し手の意味 (speaker meaning) は、Grice の概念よりもっと複雑で、or 文では what is said + what is implicated = what is conveyed が成り立つが、尺度含意表現 (some but not all) では、なぜ話し手が否定より肯定を選んだのか (some vs some not) が説明できず、表意が再解釈され散るとすべきだとした論文。尺度表現の話し手の意味をとらえるには、単なる取り消し可能な意味 (implicature) より広い解釈が必要だとする。
Chaofen Sun and Ming Chew Teo	Temporally closed situations for the Chinese perfective LE 了	中国語の完了相マーカー、le (了) を取り上げ、適切に使用されるためには、時間的境界付けのある (完結的、終了的) コンテキストが必要で、それがなければ、le (了) は独立した用法はないとする。
Jesus Romero-Trillo	Acategorical pragmatic markers: From thematic analysis to adaptive management in discourse	非カテゴリー的な (一つのカテゴリーに収まらない) 語用論的マーカーを3種類 (本来文法的属性がない @ :m, m, mm; 本来のカテゴリーが語彙的な listen, well, good, fine; 複数の語彙項目からなる句 I mean, you know, the thing is) 取り上げ、一つの音調単位の冒頭に生じると、連続する談話単位を結合する働きがあるとする。
Anita Fetzer	Contrastive discourse relations in context: Evidence from monologic and dialogic editing tasks	連続した (接続語のない) 裸文を被験者に独話と対話環境で逆接 (反対、対照) 関係を表す談話を編集・作成・評価させ、その違いと逆接関係を考察したもの。特に議論、論争を主とした談話では、逆接関係は談話の流れや共通基盤構築に重要な役割を果たし、特に過剰な記述が貢献するとする。
Lluís Payrato	Pragmatics and multimodality. A reflection on multimodal pragmatics	マルチモダリティを、verbal/non-verbal と二分した見方だけでなく、様々な形態を考慮することによって、コミュニケーションの意味、方略、対話の同定に新機軸を与える論考。意味はマルチモーダルなテキストを通して形成されるとする。
Part III: Interpersonal and societal pragmatics		
Klaus P. Schneider	Pragmatic competence and pragmatic variation	語用論的なヴァリエーションが様々な社会的グループ間で生じる場所から、語用論的能力の理論化が可能であるとする。しかし、そのためには、様々な言語の「語用論的地図 (pragmaticography)」の詳細な地図が必要であり、実験手法が有用だとする。

Anne Barron	Offers in English	イギリス英語の「申し出 (offer)」を ICE (International Corpus of English) から、話し言葉 (イギリス英語) を用いて分析する。主要な発見としては、申し出を「好意的申し出 (hospitable offer)」と「支援の申し出 (offer of assistance)」に分け、異なった方略に基づくとする。好意的申し出は優先的方略をとり、聞き手が望むものを尋ねる。支援の申し出は実行の方略をとり、話し手が聞き手にしてあげられることを述べるとする。最後にコーパスの有用性が指摘されている。
J. Cesar Felix-Brasdefer	The intercultural speaker abroad	異文化間での語用論的能力の発達の論文。第2言語学習者に「(異文化間の) 語用論的気づき (pragmatic awareness)」が形成される過程に2つの手法で考察する。スペイン語圏に留学したニュージーランドとアメリカ人の学生に、(1) Culpeper (2010) の言う impoliteness event に遭遇した時の自分の感情と相手のふるまいをレポートしてもらい、(2) ロールプレイをさせた後に、それを回顧したレポートを書いてもらい、社会的文化的規範の違いを際立たせる。両者とも、批判的分析手法を用いる。
Jorg Meibauer	Pragmatics and children's literature	児童文学 (いわゆる文学性が高い書籍だけでない) が子供の語用論的能力の発達に果たす役割を考察したもの。子供への読み聞かせを external pragmatics と名付け、例えば語彙習得は、語彙に付随する語用論的な原理習得に役立つという考えである。次に、本を読むことで虚構世界を導入し、internal pragmatics とする。例えば、過去形が本の中で使用されると、現実世界 (現在系) との区別に役立つとしている。
Jacob L. Mey	Unloading the weapon: Act and tact	Dwight L. Bolinger (1980) の <i>Language, the loaded weapon</i> (邦訳: 小野塚裕視 (訳) 『凶器としての言葉』 (こびあん書房) 1989) からヒントを得た論考。この「弾丸を込めた武器」というメタファーに、言語のみを見るという風潮にくぎを刺し、当時期待以上の評判をとったこの書に擬して、語だけが (実世界に) 現れるのではないことを、著者の様々な実体験から書き下ろしている。語の使用には話し手の周り状況すべてが (折り合いがついた形で) 入れ込まれているとする。体の動き、個人的な感情、社会的

		なつながりなおも入るのである。特に、body talk と tact の重要性が指摘されている。
Kepa Korta	The meanings and contents of aesthetic statements	ある芸術作品が「美しい」とされるのは、単に「主観的判断」と片付けるのではなく、審美的記述と審美的（美術的）評価に分けるべきだとする。それによって、芸実鑑賞という社会的活動が、認知的、言語的支援を得られるとする。

3. 各論：「共通基盤」について

本書の基盤となっている Kecskes の社会認知的アプローチの中心的な課題として、「共通基盤 (common ground)」の扱いを最初の2章から見ていくことにする。

3.1. Raymond W. Gibbs, Jr. and Herbert L. Colston, “The emergence of common ground.”

共通基盤とは、発話の産出と解釈に際して、話し手と聞き手が共通に持つ知識・信念の一部あるいは総合体のことを言うときされる。そのコミュニケーション観には、「言語という導管を通した、(個人の) マインド間を行き来するコミュニケーションモデル (a model of communication-as-transfer-between-minds via the conduit of language)」が、暗黙の了解としてある。聞き手は、話し手が前持っているはずだとする意図を、その発話場面を持つ共通基盤を通して、言語を解釈しなければならない。こうした従来のコミュニケーション観に対して、少なくとも共通基盤については、固定化した、発話の前から決まって存在するのではないこと、話し手と聞き手が同程度、同種にもつのではないことなどが古くから指摘されてきた。それに対して、Kecskes (2014)、Kecskes and Zhang (2009) では、静的で、あるコミュニティーが共通して持つ共通信念などの「中核的共通基盤 (core common ground)」と、動的で、発話の最中に共同構築される特定場面での知識である「創発的共通基盤 (emergent common ground)」にわけ、対処することが論じられている。Gibbs and Colston が以下の例で解説している。

- (1) Jill: “I met someone today.”
Jane: “Good for you.”
Jill: “He is a police officer.”
Jane: “Are you in trouble?”
Jill: “Oh, no ...” (Kecskes and Zhang 2013: 381)

問題は、Jill の He is a police officer のとらえ方である。一般に、警察官と関わりがあれ

ば、何かトラブルになったのかという共通基盤がある。その意味での Jane の Are you in trouble? であろうが、ここでは、Jill の警察官に対するとらえ方が Jane とは異なり、いわば自己中心的な (egocentric) 解釈となっている。Kecskes は、話し手の会話の初期段階での自己中心性と、会話のトラブルが生じるところで、その後両者に共通認識が生まれ、共通基盤が創発的に確立していくところから、二段階に考えている。共通基盤は、話し手聞き手両者にとって既知ではなく、アンバランスなものである。

Gibbs and Colston は、Herbert H. Clark とそのグループのレゴを用いた共同組み立て実験を取り上げ、対話形式でやりとりをして組み立てる方がビデオメッセージだけより、成功する度合いが低いこと、繰り返し被験者に作業させると、あとになるほど、レゴの名称に使われる構造が単純になることなど、共通基盤が構築される過程で、(Kecskes 流に言う) 自己中心的なモードとその後に生じる協調的なモード¹がお互いに連鎖し合い、入り交じることを指摘している。

こうした社会的相互作用を調整する能力は、長期間から短期間、ある瞬間にわたる様々な時間枠 (time-scale) 内で、人それぞれが持つ発話のゴールに結びついて働く「自己組織化 (self-organization)」から「創発」すると Gibbs and Colston は主張している。自己組織化とは「あるランダムな状態にある構成要素が、構成要素間に働く相互作用により自発的に特定の秩序構造を形成する現象」²のことを言い、生物、非生物 (雪の結晶などが代表的な例) に限らず、経済、社会組織など、人間が関わる様々な現象にも見られる。人対人の共振現象では、異なる揺れのロッキングチェアに座った二人が、視線を合わせると揺れが同期する現象も、自然界の振動に対抗して、時間的な調整をする自己組織化の例として挙げられている。

言語的・社会的相互作用において、自己組織化を通して共通基盤がどのように創発していくかについて、Gibbs and Colston は次のように説明する。話し手が言葉や動作を発する場合、複数のゴールが同時に達成される。その中には、相手との協調のため、相手が言ったことを考慮して答えるため、自分の期待と現実の差を埋めるため、相手との平衡状態を取り戻すためなどが含まれる。これらの異なったゴールが話し手の言葉や動作への制約として働き、そのゴールそれぞれは異なった時間枠で維持される。例えば、教師が学生に宿題のことを話している場面では、一般に他人と協調するというゴールがあり (長期)、

¹ 自己中心的モードを実験的に検証した Keysar たちの研究では、前者は注意 (attention) のレベルで、後者 (協調的なモード) は意図 (intention) のレベルで、途中で間違いで修正されるまで、前者が続き、その後後者の局面に入るとされているが、Kecskes、Sanders とともに、両者は入り交じるとしている。

² 北海道大学大学院理学研究院化学部門のホームページより。

https://wwwchem.sci.hokudai.ac.jp/~matchemS/research/self_organization.html

学生が宿題をしなければならないことを理解したいというゴール（短期間）、そのときの感情を特定の言葉で表すというゴール（瞬間的）が続く。それらが同時に働き、学生との相互作用によって、創発的な共通基盤が自己組織的に構築されるということになる。相互的な言語使用は、個人で持つ心的な意図表示だけで特徴付けられるのではなく、また、その個人、個人の独立した心的表示がマッチしたからでもない。上で述べた、自己中心のプロセス、協調のプロセスのみが働くというわけでもなく、この二つが組み合わさった働きをしている。

このように、Gibbs and Colston は、Kecskes の「創発的な共通基盤構築」をさらに発展させ、「多層的な時間枠（でのゴール設定）」「自己中心的・協調のプロセスの結合」「自己組織化」というキーワードで、言語や動作の相互作用的な使用を説明している。

3.2. Robert E. Sanders, “Overcoming differences and achieving common ground: Why speaker and hearer make the effort and how they go about it.”

まず、Sanders は従来の語用論では、話し手と聞き手の同一性 (sameness) が暗黙裏に当然視されていたとする。一般原理や規則は、発話が特定の状況で生じる意味を、一般的な非人格的（個人に属さない）コンテキストに結びつけて理論化されていた。個人の特異性は無関係とされていたことになる。Searle (1969) の発話媒介行為の構成規則や、Hymes (1974) の発話事象 (speech event) に関する規則で述べられた様々なコンテキストも、個人を越えたところで、固定化、慣習化していた。それを前提とすると、話し手ごとに発話が構成されるのではなく、その意図を理解する聞き手とともに、均一的に構成されていることになる。

これに対し、Sanders が準拠する Kecskes (2014) では、同一性と均一性の欠点を取り上げ、共通基盤の違いを端緒とした議論を進めている。話し手と聞き手には、発話産出と理解に、心理的な違いがあるからである。例えば、現在の状況と過去の経験・記憶をどう結びつけるのか、人ごとに異なる知覚傾向、言語処理をする際の習性などにも違いがあるのである。その違いを埋めて、同一性に導くには、話し手と聞き手の「労力」が必要なこと、またその違いは、社会的、文化的な違いに限らず、心理的にも話し手と聞き手で個別化されているという面にも目を向けている。

Sanders はおおむね Kecskes の方向に賛成しながら、以下の疑問を提出している。

- (2) 1. 相手を理解して調整する際に、トラブルを修正して共通基盤を構築するには労力が必要で、その成功は必ずしも保証されていない。それなのに、なぜ人は、お互いの違いをそのままにして労力をかけずに済むようにしないで、労力をかけようとするのか。
2. 相手を理解して調整する際に、トラブルを避けるために、会話の初期段階

でまだ十分な共通基盤がないのに、人はどのようにそれを構築するのか。

Sanders は (2)1 の「なぜ」への回答として、本書では Rhetorical Covenant (修辭的契約)³ という話し手と聞き手間での「社会的契約」を提言している。

- (3) Rhetorical Covenant: ... there is a tacit social contract among us that speaking will only be done when speakers deem that there is something to be gained from it, and that hearers when spoken to will therefore attend, process, and respond. (本書 p. 36) (下線部は筆者)

(3) は、話し手は話すことで得るものがあり、聞き手は注意を向け、言われたことを処理し、反応する、その場合のみに話すことがなされる、という暗黙の内の社会的契約があるという主旨である。この場合、話し手、聞き手双方あるいはそれぞれに利益があるという考えである。⁴ 例えば、双方に利するのは、交渉の合意・解決、祝い、計画などが成功した場合など、話し手に利するのは、要求が叶ったり、不満が取り除かれたり、忠告を与えたりした場合など、聞き手に利するのは、指示されたり、助けられたり、楽しみが与えられたりした場合などである。

話し手、聞き手双方に利益があるということは、話し手は話すことによって聞き手にもたらすものがあり、聞き手はこの話し手の意図を当然として想定しているためである。いわば、話し手、聞き手双方にとって、この修辭的契約は義務的なものであり、義務的であるからこそ、話し手聞き手に認識の差が生じた場合（トラブルが起きた場合など）でも対処が可能で、その原因が説明可能となる。

(2) 2 の「どのように」への回答として、Sanders は、話し手と聞き手の共通基盤と理解の違いが、「最小」の場合と「最大」の場合のトラブルに分けて考察している。

「最小」の場合、一般的には「同じ (same)」と分類される人の間でも（同年齢、同言語・文化、同じ社会的クラスなど）、違いが生じ、やり取りにトラブルが生じる。会話の

³ Rhetoric とする語は、ギリシャローマ時代には、公開の討論での説得術という意味であったが、後に 18 世紀の George Cambell 以降、discourse を目的に合わせるという広い意味合いで使われ始め、20 世に入ると、言語や話すことが本来的にどのように人々や状況に影響を与えるかという意味に、また現在では、社会学的に、話すことが、どのように、社会的な実体を構築する行為であるかという意味に広がっている。(本書 p. 37)。Sanders は現代的な幅広い意味で用いているとしている。

⁴ 関連性理論の処理努力と認知効果の相殺という原理と競合すると思われるが、関連性理論が認知処理といういわば心理的な側面を重要視するのに対し、Sanders は社会的側面も含むことができるとしている。また、話し手と聞き手双方に利するという視点は、話し手に課される義務重視の recipient design (Sacks and Scheloff 1979)、optimal design (Clark 1996) や、聞き手に課される義務重視の協調の原理の一側面（話し手の協調性を当然視する聞き手）、optimal relevance (Wilson and Sperber 2004) などより多くの問題を処理できると考えている。

トピックや活動といった特定の領域で生じるためである。ただし、Sanders は、Kecskes とは異なり、トラブルが修正されても、新しい、いわば第3の共通基盤は形成されないとする。こうしたトラブル修正が、ある特定の領域で生じたある特定のトラブルソースに限定されるからであるという。では、どのようにトラブルが修正されるかは、対話者間、場面場面で、共同で持つ基盤知識があるためであるとしている。例えば、次例は、電話会話がどのように開始されるかといった知識がないと修正はできない。

- (4) Hopper Archive, University of Texas: “Berkeley” ca. 1985 (本論例(2), p. 44)
- | | |
|---|-------------------------|
| ((telephone ringing)) | ((電話が鳴る)) |
| 01 Harvey: H’lo,; | ハーヴィー: もしも: し, |
| 02 Angie: Hi Harv, | アンジー: ハイ ハーヴ, |
| 03 (0.7) | (0.7) |
| 04 Angie: Yer [company the::re? | ア: あ [みんなそっち: ? |
| 05 Harvey: [(Who is it) Angie? | ハ: [(だれ) アンジー? |
| 06 Angie: ↑ Yeah | ア: ↑ ええ |
| 07 Harvey: How are ya? | ハ: 調子はどう? |
| 08 Angie: Pretty ↑ good. (0.2) Didjer company arrive? | ア: ↑ いいわよ (0.2) みんな着いた? |
| 09 Harvey: La-Yeah yeah, last night. | ハ: きの-ああ, きのうの夜ね. |

02 行目で、通常の電話の開始の合図 (Hello) ではなく、名前から開始しているところに、Harvey の声を聞き取って、瞬時にインフォーマルに話してもよいと考えた Angie のある種、通じるだろうという思い込みがある。次の 03 行目は、Harvey が Angie を認識しないというトラブルに対する (双方の) 沈黙である。そこで Angie は 04 行目で共通に知っていると思う話題、「仲間がやってくる」話題を持ち出している。これも、トラブル修正の一つの方略である。05 行目で、やっと Harvey は、いきなり Harv という親しい者どうしの呼び方 (愛称) で呼ばれたこと、共通の話題を持ち出されたことなどから、それなら Angie のはずだという推測を行っている。これらは Angie との共通基盤として、前もって持っていたものである。それをフル稼働させて、トラブル修正を行っている。ただし、Sanders の言うように、ここには新しい共通基盤の創発は見られないようである。ただし、自分には「際立ちのある (salient)」知識ではなかった部分を呼び出したというプロセスが見て取れる。

では、「最大に」違いがある場合はどうであろうか。典型的な例では、言葉や文化が全く違う者どうしのやり取りがある。最大に違っていても、ある程度の共通基盤があるので、最低限、即興でコミュニケーションはとれるとされてきた。Sanders は本書で、その見方 (彼自身の見解も含む) を修正し、人間と人間の社会に内在する「(共通基盤として)

保証済み共通基盤『床部』(guaranteed common round ‘floor’)と呼べる基盤をわれわれ全員が共有しているとする。その中には、音調、体の動き(笑い顔やしなめっ面といった顔の表情、うれしそうな声、怒った声、筋肉のゆるみや緊張なども含む)、ジェスチャー(指さしや人まねなど)が含まれ、共通の言語がなくても使える手段である。社会を構成する制度や場面として共通に持つものには、自宅であるとか会社であるとかという「物理的な場面設定」、相手の規制、相手との競争や協調、物のやりもらい、売買、情報のやり取りなどの「活動」、親族か他人か、個人的か公的か、専門家か素人か、住人か新規参入者か、所有者かそうでないか、地位・権力・社会的階層などの「役割と自己認識、資格、義務」など様々にわたる。これらはすべてを網羅はしていないが、Sandersの考える「修辭的契約」の達成には不可欠な要因である。

4. おわりに

序章でもふれたが、このように、本書は多岐にわたるトピックを様々な視点から扱っている。それぞれの章は、総合的にみると、Kecskesの一連の研究の主張を具現化していると編者であるGioraとHaughは結論付けているが、現在の語用論研究が目指している、多層的で分野横断的な研究方向と合致するものである。

参考文献 (本書の各章で引用されているものから本稿で引用したもの)

- Clark, H. H. 1996. *Using Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kecskes, I. 2014. *Intercultural Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press.
- Kecskes, I. and F. Zhang. 2009. “Activating, Seeking and Creating Common Ground: A Socio-cultural Approach.” *Pragmatics and Cognition* 17, 331-355.
- Kecskes, I. and F. Zhang. 2013. “On the Dynamic Relations between Common Ground and Presupposition.” In A. Capone, F. L. Piparo and M. Carpapessa (eds.) *Perspectives on Linguistic Pragmatics*, pp. 375-395. Dordrecht: Springer.
- Sacks, H. and E. A. Schegloff. 1979. “Two Preferences in the Organization of Reference to Persons in Conversation and Their Interaction.” In G. Psathas (ed.), *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, pp. 15-21. New York: Irvington.
- Hymes, D. 1974. *Foundations of Sociolinguistics: An Ethnographic Approach*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Wilson, D. and D. Sperber. 2004. “Relevance Theory.” In L. R. Horn and G. Ward (eds.), *Handbook of Pragmatics*, pp. 607-632. Oxford: Blackwell.